

# 歴史を語る建物たち

第3回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

## 九里学園高等学校（米沢市）



米沢市の中心部、上杉神社などがある松が岬公園（旧米沢城跡）から東へ少しばかり歩いたところに、薄いピンク色が鮮やかな、木造の建物がある。

昭和10年に建てられた私立九里学園高等学校の校舎で、平成9年に国の登録有形文化財に指定された。

### 30歳の女性の勇気ある行動

九里学園の創設者は、九里とみ（1872-1957）という女性である。

とみは、米沢の薬種問屋に長女として生まれた。19歳で福島に嫁ぐが、1年で離縁。兄を頼って上京し、東京裁縫女学校（現・東京家政大学）に通った。

とみの裁縫の技術は抜群で、卒業後は同校の助手を務める一方、島津家（旧薩摩藩主）から鹿児島に新設する裁縫塾への赴任を打診されるほどであった。

しかし、すでに家業は傾いており、とみはやむなく米沢へ戻った。明治32年、28歳の時である。

米沢に戻ってからは、家計を支えるため裁縫塾を始

めた。すると、その腕前から塾生が急増。明治34年にとみは高等女学校裁縫教員免許を取得し、越後番匠町（現在の中央4丁目付近）に九里裁縫女学校を開いた。当時まだ男尊女卑的な考えが残っていた土地柄において、わずか30歳の女性校長の誕生はさぞかし衝撃的だったことだろう。



落成した新校舎（昭和10年）。校舎左側の出っ張り小屋は、住み込みの校務員室だと思われる（現在は存在しない）。出典：『生徒活動にみる八十年』（九里学園）

明治36年には、生徒の増加で校舎を移転。しかし、不幸にして校舎は2度の焼失に遭遇した。

そして、昭和10年、米沢市役所の跡地であった現在地に新校舎（今の木造校舎）を建設した。

なお、当時の記録によると、基礎は鉄筋コンクリート造り、屋根は瓦葺きにするなど、耐震・耐火に特に注意を払った設計工事が成されている。

## 九里とみの教育理念

とみの孫である、現在の九里廣志校長は、「当時、女性の役目は家を守ることで、女性は家でも社会でも弱い立場にあったと思います。そうした中でも、自分に誇りと自信を持った“一人の人間”として自立して欲しいということを、とみは裁縫教育を通じて伝えなかったのでしょうか」と述懐する。

とみの教育は厳しかった。縫い物も、針目が一つでもずれていると最初からやり直させたという。また、昭和7年からは、年に2回、全校生徒で裁縫の基本的な針運びがどれほど正確かつ迅速にできるかを競い合う「運針競技会」が行われた。

そこには、人のために尽くす誠実かつ責任感のある人間を育てると共に、裁縫の技量を通じて自分に自信を持たせるといふ、とみの教育理念があった。

一方で、羽根突きなどのクラスマッチを取り入れるなど、実行力ある女性の育成も目指した。

現在、クラスマッチは百人一首大会などに変わり、生徒たちはボランティアで、学校の受付業務や併設する幼稚園での園児の世話をしている。

こうした活動も、とみの教育理念を今に引き継いでいるものと思われる。

## そして木造校舎は残った

戦後の学制改革（昭和22年）で、九里裁縫女学校は米沢女子高等学校と校名を変更した。昭和34年には普通科を設置し、それと前後して校舎の拡大やグラウンドの整備などが行われた。

さらに、平成4年に就任した九里校長は、就任直後から高校の男女共学化を考えていた。それは、いわゆる少子化対策というよりも、むしろ、創立以来の教育理念を男子にも教えたいという思いがあったからである。

しかし同時に、男子を入学させたら、ただでさえ老朽化した木造校舎に、さらに負荷がかかって壊れかねないのではないかという不安もあった。九里校長は、「男子が入学した場合、木造校舎を取り壊して新校舎を建てることも検討していました」と、当時の胸の内を語る。

折しも、米沢市から、木造校舎を登録有形文化財にしてはどうかという話があり、そのことが、木造校舎解体を思いとどまる大きなきっかけとなったと九里校長。学校に、新校舎建築の予算が十分になかったことも、結果的には幸いだった。

平成11年、米沢女子高校は男女共学化によって、九里学園高校と校名を変更した。そして、木造校舎は損傷部分を補修しながら、生徒によって毎日磨かれるガラス窓と共に、往年の姿を今に残している。

## 校舎は「箱」ではない

九里校長は、「校舎はただの“箱”ではありません。校舎には、『わが校はこういう教育をしたい』というメッセージがあります。生徒を含めた多くの方たちに、わが校の校舎を見て何かを感じて欲しいと思います」と語る。そんな九里校長は今、「火災が心配」と言いながら、木造校舎を壊さなくて良かったと感じているようだ。

今日、全国でも山形県内でも、耐震性などを理由に、古い木造や鉄筋コンクリートの校舎がどんどん建て替えられている。卒業生にとって、成長期のある時期を過ごした学舎が、ある時、何の変哲もない「箱」になってしまうのは、帰るべき家がなくなることに等しい。

その点、この学校の卒業生は、木造校舎に来るとホッとすると聞く。高齢の卒業生の中には、わざわざ車で寄り道してもらい、木造校舎を車中から眺める方もいるそうだ。そんな時、卒業生は「生徒」に戻るのだろう。

なお、九里校長によると、最近、筆者も含めて、木造校舎への取材や見学依頼が増えているらしい。

これは、社会や経済などがめまぐるしく変化する現代において、「いつまでも変わらずそこにあるもの」への渴望の現れではないだろうか。



校舎の敷地に建つ、学校創設者・九里とみ先生の銅像。今日も厳しく、そして優しく生徒たちを見守っている。

（荘銀総合研究所研究員・山口泰史）